

第 17 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「二人のおじいちゃん」

埼玉県立浦和第一女子高等学校二年 肥沼 由里子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『二人のおじいちゃん』

埼玉県立浦和第一女子高等学校二年 肥沼 由里子こいぬま

「んま、んま、んま、んま……」

赤ちゃんに戻っていくみたい。大介は呟つぶやきました。夜中にトイレへ行こうとしたら、おじいちゃんの声が聞こえてきたのです。——これじゃ朝ご飯のときには眠っちゃうなあ。

「きょうは、あ、おつかれさまでしたー」

暗い部屋のベッドの上で、おじいちゃんは喋しゃべり続けています。誰もいない所に向かって。

三年前、大介が七歳の頃、父方のおじいちゃんは大介の家で暮らし始めました。腰を痛め、一人で生活できなくなったからです。それまで歩いていたおじいちゃんは、家に来たときにはまともに歩けませんでした。「これからよろしくね」おじいちゃんは言いました。

いつからだだったか、今となっては誰にも分かりません。寝たきりになったおじいちゃんはぼけ始めました。おじいちゃんをおじいちゃんたらしめているものが抜けていきました。家族が名前を間違えられることもしばしばです。前の家にいたおじいちゃんと今のおじいちゃんが同じ人だとは、正直大介には思えません。そのひどい変わり様を、大介は恐ろしく、また悲痛に思うのです。おもしろい昔話をしてくれた、楽しい遊びを覚えてくれたおじいちゃんは、どこへ行ったのでしょうか。

おじいちゃんは認知症になったのです。

次の日は日曜日だったので、大介はおじいちゃんに朝ご飯を食べさせることになりました。おじいちゃんは自分で食事をするのができないので、介助が必要なのです。食事のときだけは車椅子に座るので、その横に座ってご飯をあげます。



でも案の定、おじいちゃんは車椅子に座ったまま眠りだしました。スプーンに肉じゃがを乗せて口の前に差しだし、口を開けるように促しますが、開ける気配は全く感じられません。目はずっと閉じられています。このままでは朝ご飯は一向に終わらないでしょう。

「洗濯物干し終わったからもう代わるわよ」

困り果てていたところに、お母さんがベランダから戻ってきて言いました。大介が椅子から立ち上がり、そこにお母さんが座ります。

「ご飯食べましょー」

お母さんが明るい声で呼びかけますが、おじいちゃんはお地藏様みたいに動きません。

「全然口を開けてくれないんだよ」

そう大介が言ったとき、お父さんの声が飛んできました。

「なら寝かせてほっときゃあいいんだよ」

いつもこれだ。大介は溜息をつきました。お父さんは、家族がおじいちゃんの介護に振り回されていると思っていますのです。確かに介護が始まってから、家族で出かけることは少なくなりました。けれども大介は、お父さんが介護をさっさと終わらせようとするのが大嫌いです。

「そんな風に言うのはやめてー！」

お母さんが言い返し、あっという間に二人は喧嘩を始めました。大介はうんざりして自分の部屋に戻りました。

立ち上る土の匂い。蝉時雨が真夏の熱気を震わせています。目の前の朽ちかけた木の門を開ければ、細く続く庭があるはずだ。大介には分かりました。その一番奥に玄関があるのです。

門を開けると想像通りの庭がありました。小走りで玄関まで向かいます。ほおずきの鮮やかな橙色が壁の裏に残りました。

こんこんとドアをノックします。しばらくして、おじいちゃんがドアを開けました。

「はい、いらっしやい。上がって」

言われるままに家に入ると、懐かしい匂いがしました。畳の部屋の座布団に大介が座ると、おじいちゃんも隣に座ります。



「現実でのわしはすっかりぼけているだろ。ここにいるのは現実世界にいるわしから抜けでた、普通のわしだ。昔のわしと同じだ。今日を入れて三回、夢の中で大介と会える」

大介の頭はこんがらかりました。何がどうなっているのか考えようにも、蝉の声が部屋いっぱいに響いていて考えられません。

「まあ、小難しいことは考えなくていいよ」

優しく言いながら、おじいちゃんはお茶を出してくれました。

それを飲んで少し休んだあと、おじいちゃんは大介に話しかけてきました。「庭のほおずきを探りにいかないか？ そろそろお盆だろう。仏壇に飾るんだよ」

おじいちゃんが指で示した先には、こぢんまりとした仏壇がありました。

二人は庭に出ました。きれいに色づいたほおずきの実には皺しわがあつて、おじいちゃんの頬ほほみたいです。おじいちゃんは実が多めの茎を、根元から鋏はさみで切つて言いました。

「これを横向きにして使つんだよ」

部屋に戻り、大介はおじいちゃんの教えてくれる通りにほおずきを飾りました。仏壇の前には茄子なすでできた牛や、柔らかい明かりに彩いろられた盆提灯ちようちんもあります。

飾り終わると大介は仏壇に拝みました。

「手伝つてくれてありがとう」

おじいちゃんはそう言いながら、大介に立派なほおずきの実を一つ手渡ししました。

「お土産にこれ、持っていきな」

ふわりと手に載のっているそれは軽いけれども、大事な物のように思えました。漬つけさないように、そつと手で包み込みます。

「ありがとう」

大介が言ったのと同時に、部屋の時計の鐘が鳴りました。

「おや、もうお別れの時間みたいだね」

おじいちゃんはそう言い立ち上がりました。

「そっか……おじいちゃん、じゃあね」



おじいちゃんは手を振り見送ってくれました。不思議な振り方だ、と大介は思いました。さよならの意味で振っている手が、まるでおいでおいでをしているようなのです。

妙な夢でした。全くぼけていないおじいちゃんと会うなんて。しかも夢に出てきた古びた家は、おじいちゃんがここに来る前に住んでいた家です。ベッドに入ったまま、大介はさらに夢の内容を思い出します。

あの細長い庭、踏んだ土の感触。部屋の匂いに、小さな仏壇。昔おじいちゃんの家に行ったときの記憶と、

全て同じでした。お盆のときに仏壇を飾っていたのも本当です。そしてあの手の振り方……確におじいちゃんはあるあいう不思議な手の振り方をしていたのです。□ではばいばいと言いつつ、手はおいでおいでをしていました。いつも別れ際には、閉まっていくドアの隙間に見えるおいでおいでを見ました。

「いいことだと、おもい、まーすーうっ」

隣から声が聞こえてきます。やはりおじいちゃんはぼけているようです。学校から帰り、大介はおじいちゃんの所に行きました。

「ただいま」

声を掛けると、おじいちゃんは真っ黒な瞳でこちらを見て答えます。

「はいおかえり。あめふってた？」

おじいちゃんはなぜかこの質問が好きです。

「降ってなかったよ。じゃあ、おやすみ」

……返事がありません。まあよくあることだ、と気にせず自分の部屋に向かおうとすると、おじいちゃんは突然□を開きました。

「またねー、きょうすけくん」

僕はただ大介だけだと少しがっかりしながら、もう一度おじいちゃんを見ます。

大介は息をのみました。

おじいちゃんが、手を振っています。昔のおじいちゃんと、夢の中のおじいちゃんと、同じ振り方で。



認知症を患^{わづら}い、おじいちゃんは別人になったと大介は思っていました。姿と声だけ残されて、その他のものは全て失われたと。でも今、おじいちゃんのどこかにおじいちゃんらしさが残っているようだと分かったのです。

おいでおいでをされながら、大介は部屋を出ました。

土の匂いがします。大介はまた、前のおじいちゃんの家に来ていました。木の門を開き、玄関まで行ってドアをノックすると、おじいちゃんが出迎えてくれました。

「はい、いらっしやい。上がって」

最近こんな風におじいちゃんと会った、そうだ夢の中で会ったんだと、大介は気づきました。そのときのおじいちゃんの言葉が、蘇^{よみがえ}り、あれは嘘^{うそ}じやなかったんだと思いました。

「今日で二回目だね、大介」

「うん。僕嬉^{うれ}しいよ、また元氣なおじいちゃんに会えて」

おじいちゃんはすごく寂しそうな顔をして、大介の頭を撫^なでました。優しく、慈^{あま}しむように。相変^{あひ}わらず蝉の声は響^{ひび}いています。

「今日は謝^{あや}ろうと思うんだ」

おじいちゃんは何も悪いことしてないのにどうして、と大介は戸惑^{うたが}いました。

二人は座布団に座りました。おじいちゃんはこの前と同じようにお茶を出し、深く息を吸って、吐いて、切り出しました。

「現実世界のわしが迷惑掛けて、ごめんな」

大介は何も言えませんでした。ただ俯^{うつむ}きました。そっと頭を上げると、おじいちゃんはひどく悲しそうな顔をしていました。見ていられなくて、大介はすぐに目を逸^そらしてしまいました。

「大介も、お前のお父さんもお母さんも、わしのせいで嫌な思いをしてるよな。わしにご飯を食べさせるのは大変だろうし、介護サービスにだってお金^{かね}が掛かるだろう。家族旅行にも行かなくなってしまうたようだね」

どんな言葉を掛けたらいいのか、大介はずっと考えていました。でも上手い言葉は何一つ見つけられません。自分の不甲斐^{ふが}なさに、大介はシャツの裾^{すそ}をぎゅっと握り締めました。



「年寄りのわしが、若いお前たちの人生を邪魔するなんて、おかしい話だろう」

「それは違うよ、おじいちゃん」

大介は自分でも驚きました。□が勝手に動いていたのです。もちろんこの後に続ける言葉なんて考えていませんでしたから、また黙り込んでしまいました。そして俯きます。顔がかあっと熱くなっていくのが分かります。

突然、背中に何かが触れるのを感じました。お日様の光みたいにあったかくて、そこにあると安心できるもの。

それはおじいちゃんの手でした。おじいちゃんが背中にそっと手を置いたのです。

「優しいねえ大介は。優しくすぎるくらいだ」

大介はびくりと肩を震わせました。

「……優しくなんかないよ。おじいちゃんに何もしてあげられてないもの……ごめん」

大介の声は掠^{かす}れていって、尻^{かす}つぼみになりました。ひっきりなしに鳴く蝉が沈黙を埋めています。大介はどうしてもおじいちゃんの方を見る事ができません。分かるのは、おじいちゃんの手があったかさと安心感だけです。その手の指先に少し力が入ったとき、おじいちゃんが□を開きました。

「大介にも、お父さんにもお母さんにもたくさん苦勞を掛けて、悪い奴だよ、わしは」

「お父さん……」

お父さんがおじいちゃんへの介護を嫌がるのを、大介は思い出しました。顔を上げ、思い切って尋^{たず}ねました。

「ねえ、おじいちゃん。お父さんのことどう思ってる？ お父さん、すぐおじいちゃんの世話を終わらせようとするから」

おじいちゃんは息を一つ吐き、答えました。

「お父さんがあなるのも、仕方ないんだよ。あまりお父さんを責めないでやってくれ」

大介は意外に感じました。自分のことを邪険に扱う人を庇^{かば}うなんて。



賢治のまちから 高校生☆生活大賞

「現実世界のわしなんて、悪い奴の癖にお気楽だよ。何にも分からないまま人の世話になって、毎日が過ぎて……差し迫る死の恐怖すら感じないんだから」

大介は、自分の気持ちを言葉にして伝えなくてはいけないと思いました。「おじいちゃんは悪い奴でもお気楽な奴でもない。僕にとつてのおじいちゃんは、いろんな遊びを教えてくれたおじいちゃんだよ。認知症になってからも、おもしろいことを言っ僕を笑わせてくれたよね。いつだっおじいちゃんは優しくかった」

おじいちゃんは大介の背中をゆっくりとさすって呟きました。

「……本当に大介は優しいなあ」

おじいちゃんの目尻にじわりと涙が滲にじんだことに、大介は気づきませんでした。

その涙が夕日の赤に染まったとき、時計の鐘が鳴りました。

「さあ、今日はもう帰る時間だ」

「もう？」

大介は後ろ髪を引かれる思いで玄関に向かいました。

靴を履いて振り返ると、おじいちゃんはおいでをできるように手を振っています。

「またね、おじいちゃん」

大介も手を振っておじいちゃんと別れます。

外は夕暮れ時でした。家々も電柱も畑も、赤色の大洪水に飲み込まれていました。

まだ、燃えるような赤が目沁しみみているように大介は感じました。夢でのおじいちゃんの言葉を思い出します。

大介は、まさかおじいちゃんが謝ってくるとは思いませんでした。大介には、夢の中のおじいちゃんも現実世界のおじいちゃんも、肩身が狭そうに感じられます。いたたまれない気持ちになりました。

「大介、起きたならちよっと手伝って」

お母さんに呼ばれ、そちらに行きました。

「朝の薬をあげてほしいんだけど」



そう頼まれ、大介は車椅子に移っていたおじいちゃんに薬を飲ませました。薬を飲み終えたときです。ずっと黙っていたおじいちゃんが喋りだしました。

「もつうちへかえりたいよ。なみこがしんぱいしてる。なみこに、あいたいんだよお」

ナミ子。大介とお母さんはどきりとして顔を見合わせました。ナミ子というのは、大介が生まれる前に死んでしまった大介のおばあちゃん、つまりおじいちゃんの奥さんです。

大介もお母さんも戸惑ってしまいました。本当のことを言うべきなのか、適当なことを言って誤魔化^{ごまか}してしまつべきなのか――。

一度目と二度目のときと同じで、土の匂いがします。目の前には朽ちかけた木の門。これで最後だ、と大介は思いました。

玄関のドアをノックすると、おじいちゃんが出迎えてくれました。

「はい、いらっしやい。今日で最後だね」

おじいちゃんは、少し笑いました。

おじいちゃんと一緒に大介が部屋に入ると、一人のおばあさんが座っていました。大介の知らないおばあさんです。でも何故か、大介にはおばあさんが赤の他人とは思えません。

「この人、誰だか分かるかい？」

おじいちゃんが大介に聞きます。

「分からない……でも、前にどこかで会った気がする」

そう答えると、おじいちゃんはにっこりと笑いました。

「この人はね、大介のおばあちゃんだよ」

「おばあちゃん……」

大介は、おばあちゃんだと教えられた人をまじまじと見つめました。不思議な感じがするとともに、胸が高鳴りました。

「こんにちは大介君。会えて嬉しいわ。あなたが生まれてくるの、楽しみにしてたのよ」

おばあちゃんは大介に話しかけ微笑^{ほほえ}みます。

「こんにちは、僕のおばあちゃん」



大介がおばあちゃんの前に座ったところでおじいちゃんは喋りだしました。昔を懐かしむような遠い目をしています。

「おばあちゃんが入院したとき、大介のお母さんがお見舞いに来てくれたんだ。そのとき、お母さんのお腹には新しい命が宿っていた」

大介ははっとしました。

「それって……」

「そう、大介、あなたよ」

おばあちゃんは答え、続けます。

「『男の子？ 女の子？』って尋ねたら、お母さんはね、『男の子です。大介って名前にするんです』って言ったの。私、あなたの命が誕生してすごく嬉しかった。それで私ね、お母さんの大きなお腹をさすりながら、

『大介君、あなたが生まれてくるのを皆楽しみにしてるわよ。元気に生まれて幸せに育ってね』って言ったわ。あなたが力強く動くのを手のひらに感じて、ああ命が確かにここにある、そう思った。あなたが生まれる前に私は死んでしまったけれど、今こうして会えて本当によかったわ」

大介は自分の身体の片隅に、おばあちゃんに撫でられた柔らかな記憶があると感じました。あたたかさに満たされていた頃の、大切な記憶。

「ありがとう。いろいろ話してくれて」

大介がそう言ったとき、時計の鐘はさよならの時間を告げました。

「……お別れの時間だね」

おじいちゃんは低い声で言いました。大介は無言でこくりと頷うなづきます。

おじいちゃんは大介の手を取りました。

「大介とかげがえのない時間を過ごせて、よかった。大介、立派な人になれよ」

おじいちゃんの手には力がこもっていました。おばあちゃんは大介を抱きしめました。

「会えてよかった。幸せになってね」

その声は優しく大介に響きました。

「僕もおじいちゃんとおばあちゃんに会えてよかった。ありがとう。ばいばい」



大介は涙を堪え、やっとのことでそれを伝えました。庭に出て振り返ると、ドアの隙間から手を振る二人が見えました。二人とも笑顔でおいでをしています。

最後の時間を、夕焼けは美しく染めあげていました。

もうあのおじいちゃんとおばあちゃんに会うことはないんだ。大介は考えていました。

「大介、私が洗い物してる間、おじいちゃんに朝ご飯食べさせてくれない？」
お母さんからお願いされ、大介はおじいちゃんの所へ向かいました。

大介が玉子焼きを食べさせると、おじいちゃんは顔をほころばせて、

「おいしいよ、ありがとう」

と言いました。大介も笑顔になります。夢を見る前よりおじいちゃんの気持ちに寄り添えるようになったと、大介は感じていました。

おじいちゃんは確かにほけたけれど、幸せを感じることはできる。だからおじいちゃん的笑顔を増やそうと、大介は決心しました。

おじいちゃんとおばあちゃんは、大介が帰った後に夜の公園へ行きました。

ベンチに並んで座りました。おばあちゃんがおじいちゃんの肩に頭を預けて囁きます。

「覚えてる？ 私達ここで出会ったのよね」

「もちろん覚えてるさ。もうずっと前のことなのに、昨日のことのように思い出せるよ。あの日も今日みたいに星がきれいだった」

二人の上には満天の星空がありました。

二人は、静かに、ゆっくり、歩んできた人生を振り返りました。子どもが生まれたときのこと、家族で出かけたときのこと――。

不意に一筋の光が、夜空を駆け抜けていきました。流れ星です。二人が顔を上げると、また一つ美しい流れ星が飛んでいきました。

二人は願いました。大切な男の子のために。